

## 第5回校友会主催中国旅行

### 明・清の面影をのこす江南の水郷 周庄・蘇州の旅

1998年3月13日～17日 5日間

校友会会长 長谷川 良一

すでに恒例になっている校友会主催の中国旅行は、毎年の春の理事会・総会で大まかなプランが提案されて討議され、その結果、決まるのが通例になっていたが、今回は私個人の特殊的な精神的事情があって、理事会では旅行の具体的な案が提案出来ず、その実現は危ぶまれていた。やっと8月の段階になって、私が気を取り直して、独断で大まかなプランを決める気になったので、そのプランを交渉ワールドの松田さんと相談して部分修正し、実現にこぎつけることが出来たのである。

周庄は、明・清の面影を残す江南の水郷として最近クローズ・アップされていて、私人としても前々から一度訪れてみたい土地だったので、参加者に満足が頂けるかどうかの不安はあったが、今回の行く先はそこに決めることにした。昨年の西安旅行では人数が多くすぎるという苦情があったので、人数はバス1台に乗り切れる40名と決めた。また昨年の西安旅行では、4泊とも一つのホテルであったことが好評だったので、出来れば今回もそれを踏襲しようと思った。周庄は上海からでも蘇州からでもバスで行けるが、今回の場合は、出来れば蘇州に宿を取ったほうが水郷の旅にふさわしいし、また、上海空港からはバスで蘇州に直行出来る事が判ったので、宿は蘇州にすることに決めた。はじめは蘇州飯店をと考えていたが、ガイド・ブックで見ると、竹輝飯店の外観が北京の香山飯店のそれに似た東洋風のものだったので、今回の旅にはさらにふさわしいと、それに変更することにした。また時間的な余裕から松田さんが、さらに大觀園と角直のどちらかに行けると提案したので、私は躊躇なく角直を選んだ。大觀園は観光用に新たに作られたものにすぎないが、角直は、代表的な水郷の一つだし、文学者葉聖陶のゆかりの土地であり、それに保聖寺に

は唐代に作られた羅漢像の傑作があるからである。

蘇州については、たくさんの素晴らしい庭園があるので、庭園巡りも一つの手であると考えたが、余り多くの庭園をまわりすぎて、皆さんの印象が混乱してもまずいので、代表的な拙政園と、それと対照的な太湖石を主体とした、中国風石庭である獅子林を見てもらうことにした。それに、ずっと前に網師園では文化晩会が催されていると読んだことがあるので、もし今でもそれが続いているとすれば、一夜はそれを鑑賞してもらおうと思った。また、蘇州の昔の姿と風俗を理解してもらうために、民俗博物館と磐門の見学を加えた。

蘇州については、私は解放前と後をあわせて8回訪れているので、予備知識は十分あつたが、周庄については人民日報などの情報だけが頼りだったが、出発のすこし前になって陳真先生から、予期しなかった周庄の詳細な案内を送ってきてくださったので、周庄の具体的なイメージが掴めて、蘇州第一日目の夜の私の話の時おおいに役立ち、本当に有り難かった。

毎回の旅行では、適当な人をお願いして講演会を行なっていたが、今回の旅行は私の独断で計画をたてたので、理事会を開いて適当な人を人選する余裕は無かったし、前々から一部の理事の間では、私の話を聞きたいという要望もあったので、今回は「私の青春グラフティ」と題し、私が16歳で上海に渡った頃の話、過去8回の蘇州訪問の話、この度の旅行見所等の解説を行うことにした。それが果たして好評だったかどうかは、参加者の皆さんに聞いてみなければ判らない。

第2日目の、この度の旅行のハイライトであった周庄・同里は、私の予想していた以上に大好評だったので、安堵の胸を撫で下ろし



た。周庄では毛主席の詞にも出て来る柳亞子の主催した南社の活躍した迷楼、中國国内で唯一残る民家の二階の高さに懸かる富安橋、周庄の名を一躍有名にするきっかけになった双橋、明清時代から残る江南の豪邸張庭・沈庭を見学し、沈庭酒家では沈家に伝わる名菜「万三蹄」を

賞味した。この名菜に限らず、出てきた料理はすべて地方料理の味を濃く残していて、その味はなかなかのものであった。午後は船で同里に移動し、清代の庭園、退思園を見学した。周庄と同里を比較してみると、前者は余りにも有名になりすぎ、上海からどっと人が押し掛けたので、町中が土産物店だらけ、人だらけで、すっかり水郷の静けさを失ってしまっていたが、後者のほうは、退思園以外は訪れる人もなく、町中に水郷の日常生活がそのまま残っていて、時間がゆっくり流れ行く感じで、最後の日に訪れた角直と共に喧騒とはまったく無縁の別世界であった。これから周庄を訪れる人があれば、私はぜひ同時に同里や角直に行くこともお薦めしたい。その日の帰路には、運河の船を綱で引くための通路として、唐代に出来た宝帶橋を見学した。一昨年の紹興から杭州の道では別の道を通りたため、運河の船引き橋が見てもらえないからである。

第3日目は盤門の見学、過去1944年の春と1945年の夏の二度訪れたことがあるが、城門そのものは元のままであるが、辺りの風景は半世紀前の記憶とはすっかり変わっていた。盤門から船で訪れた寒山寺は、1945の秋、寺の僧坊に一泊した事があり、その後も1966年の春、1975年の夏と二度訪れているが、最近の観光ブームの影響か、すっかり綺麗に塗り



替えられ、遙か昔失われていた塔も復元されて、歴史の古さを全然感じさせない、綺麗綺麗なものに変わっていた。また時がたてば、その古さは戻ってくるであろうが。虎丘は、解放後初めて訪れたときには周囲の解放前との変化に驚いたが、虎丘そのものは、その後の数回の訪問でも基本的な変化はなく、春の花の展覧会が開かれていて華やかな雰囲気だった。北寺の塔へ登る料金は、最近二元から五元に値上げしたばかりか、その最上階に登るには、その場でさらに一元追加料金を払わされるがめつさ、ほどほど呆れ果ててしまった。民俗博物館では清末・民初の色々な店のミニチュアが興味深かった。獅子林と拙政園の見学では、太湖石だらけの前者より、広々とした後者の方が日本人の参加者に歓迎されたようである。

その夜、今年の初日であった網師園の文化晚会は、いろいろな部屋を巡りながら、そこで演じられる昆劇・民族音楽・昆曲・踊り・評弾などの短いものを鑑賞する形式だったが、圧巻は四阿で池を隔てた部屋で奏でられる笛を聴いたときで、空に月でも出ていればさらに素晴らしい時になったに違いない。この晚会は、私の予想していた以上の大好評で、参加者一同、昔のお金持ちの生活の一片を味わえたことで、きわめて満足したようであった。

第4日目の午後には、初めての試みにて

のベンキに塗られた古い木造の家並みはすっかり一掃されていて、全然別な近代的な都会に生まれ変わっていた。前2回の訪問時にも感じたことだが、昆明の人々は老若男女を問わず信仰心が厚く、第1日目に訪れた圓通寺では多くの若者たちが線香を手に盛んにお祈りしていたばかりか、本堂では満員で外まで溢れ出した一般婦人たちが僧服に身を正し、経文を一心不乱に唱えていた。

60年代のはじめ「五朵金花」という映画が上映されていて、ペー族の住む大理は一度訪れたいと思っていた。シーサンパンナの宿舎が会議開催中でゆけないとわかった78年の8月の公費旅行の時、その代わりの行き先にと要求し、バスで片道1日はかかるとわかり断念したその大理が、この度は飛行機で何と20分の速さであった。空港ではペー族の服装をした娘さんが出迎えてくれたが、それは旅行社から派遣された漢族のガイドであった。ペー族では女性は美しい者から金花、銀花、銅花、鉄花、ハンサムな男性は阿鷹と通称されるところで、映画の中でも5人の美しい金花と乗馬に優れた劍川の阿鷹が登場していた。運転手(ペー族)の話では、唐代には南詔国、宋代には大理国として栄えたペー族も、現在では漢族化が進んで、70%以上の習慣が漢族と同じであり、北京などではすでに見かけられなくなっている春節に春聯、門神を門口に張る習慣なども、全ての家で忠実に守られていて、まるで古き時代の中国に引き戻されたようであった。ただ宗教だけは仏教、道教のほかに万物を神として祀る本土教も信じられていて、お寺もその三宗教が混在するものが多いようである。

雪の残る雄大な蒼山の山並みと菜の花が映える、金梭島への上陸を含めた洱海での舟遊びを終えて、周城村の見学の途中では、偶然にも村人総出のお祭りのようなペー族のお葬式に出会った後、ペー族の藍の絞り染め工場を見学した。藍染めといっても日本のように藍玉を発酵させて染めるのではなく、風邪の漢方薬である板蘭根と石灰を混ぜた液で染めるものであったが、原産地とあって値段は格安なのであろう、

多くの女性団員が盛んに品定めしていた。昼食の後訪れた蝴蝶泉は、ミュージカル仕立ての映画「五朵金花」では劍川の阿鷹と金花が恋を語る重要なシーンで、中国人なら誰でも知っている場所なので、多くの中国人が5元の貸し衣装代を払って阿鷹、金花に成り済まし、盛んにカメラに納まっていた。喜州ペー族村では、伝統的な豪族の屋敷跡を観光スポットにし、その中庭に舞台を作り、三種のお茶で客を迎えるペー族の茶の作法(三道茶)と歌と踊りのショーを見せてくれたが、時間の関係からか、屋敷全体は見学できず、三房一照壁(中庭の東側には部屋を作らず高い白壁にし、西側の部屋の午後の採光を考えたペー族の建物の形式)の説明があつただけであった。せっかく本場の大理まできたのだからという団員の要望を入れて大理石工場を見学したのち、大理古城からすこし離れたホテルに到着したが、夕食時にペー族民族楽団による一時間のショーがあったのは思いがけぬ収穫であった。翌朝見学した崇聖寺三塔は、大理のシンボルとして絵葉書などよく見かけるものだったが、この目で見る朝日に映える三塔の光景は感慨ひとしおであった。ただ大理古城について言えば南門を見学しただけで、街並みそのものさえかいま見ることもできなかったのは、時間の関係とは言えいささか残念であった。

大理を離れて三時間半の行程で麗江に着いたが、町に近づくにつれ、前方の青空に玉龍雪山がくっきり姿を現したのは、まさしく感動的だった。団員一同の精進がよかつたせいか、旅は連日晴天に恵まれ、麗江滞在三日間は、町並みの間や公園や菜の花畠から日の出、日中、夕暮れとそれぞれ変わる、また第3日目の雲杉坪からはスイスの風景を思わせる雄大な姿で、玉龍雪山の様々な姿態を私たちに堪能させてくれた。麗江到着第一日目の午後は、北西の青海省から流れてきた金沙江(長江の上流)が北東向きに大きくV字型に流れをかえる、長江第一灣の石鼓村を見学した。この地は古来からの渡し場で、1935年10月には賀龍たちの率いる紅軍第2方面軍も、この地から筏を組んで金沙江を渡り延安を目指したことである。麗江第2日

観前街での半日の自由行動の時間を設けたが、中国語の堪能な人は別として、言葉のあまり得意でない人はまごつくかもしれないと考え、希望者には、現地の旅行社の人に、お茶・お菓子・漢方薬・書店・デパートなどを案内してもらうことにした。繁華街の商店なので、観光地の土産物店と違って、値引きさせる楽しみは味わえなかったかも知れないが、値段相当の確かな品物が手に入ったはずである。よほど目利きが出来ないと、観光地の土産店などでは、とんでもない安物を掴まされることがよくあるからである。

旅行の楽しみの一つに、美味しいものを食べるということがあるが、昨年の旅行記にも書いたように、西安ではかなり不満が残った。しかし今回の旅では、既に述べた周庄の沈厅餐厅、それに蘇州の清代からの歴史を持つ松鶴樓、60年代の映画の物語から生まれた得月樓の料理は勿論のこと、それ以外の食事も、流石に江南文化の古い土地柄だけあって、1、2回を除いて参加者を十分に満足させるものであった。

私個人は、若い頃から旅先での朝の散歩が大好きであったが、江尻理事の提案で、第2回の旅から有志による朝の散歩が始まった。回を重ねるにしたがって、その参加者がふえ、今回の旅行でも、3回の朝6時からの散歩には10名以上の人人が参加し、街角のあちこちで売られている「早点」を試食したが、その中では「黃橋燒餅」「鷄蛋餅」がとても美味しかった。果たして参加した皆さんはどうであつただろう。

今回の旅のハイ・ライトの土地が私の未見だったので、皆さんに満足して頂けるかとても不安だったが、それを吹き飛ばすように、参加者の大好評を博することが出来たので、今はほっと胸を撫で下ろしているところである。このような成功に導いてくださった校友会の事務局の皆さん、毎回の格安の料金で旅行を提供してくださる交気ワールドの松田さん、旅行中皆さんのお世話をしてくださった石黒さん、快適な旅行の実現のために協力を惜しまなかつた全員の皆さんに厚くお礼を申し上げる。

(1998年3月21日)

